

## 教科で進路を考える 高校生

今日も進学相談会で店を張る。高校生がやってきて、理学部物理学科の説明を受けたいという。「なるほど、あなたは高校では物理が好きで、そして得意なんですね」と聞くと、高校生は少し照れくさそうにうなづく。

ほのぼのとしたエピソードから始めようとしたのではない。仕事柄このような場面をしばしば経験するが、そのたびに学校から与えられる「教科・科目」という枠組みに私たちがどれだけ強く囚われているか考えてしまうのである。物理が得意で、ものづくりに興味があるならば工学の道もある。物理は好きだが化学は苦手であっても、物理学科では高分子物理学を勉強することになるかもしれない。

学校は児童・生徒にとって必要なことや大事なことを選択し、それを分類して教科を通じて伝えようとする。その教科も、学校教育の発達とともに形成されてきた人為的なパッケージであり、そこに詰め込まれる知識はもちろん、パッケージであるその教科自体も絶えずアップデートされてきたはずである。なので、大学進学にあたってその枠組みにこだわる必要はないはずなのだが、物理が好きだから理学部物理学科というように、教科や科目を通して進路を考える高校生は少なくない。

## 教科という 強固なデバイス

このような「教科の力」について考えさせられたもう一つの出来事にも触れておきたい。授業で海外の大学入試問題を示し、これが解けるかと尋ねた。世界恐慌に関する論述問題であったが、「できない」と答えた学生の多くは、続けて「世界史は高校でやってないから」と述べてきたのであった。世界史の未履修問題が露見する以前の

大谷 奨

筑波大学アドミッションセンター教授

⑤その「世界史」を越えてゆけ

曇りのち晴れの  
アドミッションな日々



話である。その時私が当惑したのは、習っていないから知らない、だからできなくても恥ずかしくない、という考え方である。教科・科目はそれほどまでに強固なデバイスなのだ。

学校が教科を通して教育するのは、そうすることで効率よく伝えられるからである。だが長年そのような教わり方をするので児童・生徒の頭の中には次第に、ここには理科を入れる、ここは社会科を入れる、といった引き出しが形成されていくのではないか。

高校では教科は科目に展開する。科目ごとに先生も変わるし、教科書も別々になるから、引き出しもさらに細分化される。その際、習った科目だけではなく、もし習ったなら、そこに収めるつもりであった科目の引き出しも出来上がっていく。かくして生物や地

理の引き出しはできるが、選択しなかったのだからそこには何も入っていないという状態が生じる。だけど習っていないのだから空っぽなのはしかたないのだ。言ってみるなら、「教科的知識観」ということだろうか。「教科・科目」は知識を詰めるパッケージなのだが、同時に知識を収める頭の中をこのようにフォーマットしてしまう。

## 教科的知識観と 大学入試

この教科的知識観を批判することは簡単だ。習ってきたことを自由に展開して組み合わせる。その際、修めた知識全てを使う必要はないし、足りないなら自分で調達する。それが大学での勉強の楽しみではないのか、と。しかし私だって大学に入りたての頃は、高校英語のノリで語学の授業に出席する一方、教育学概論では既習の教科や科目に無理やり当てはめながら理解しようと呻吟していたわけである。大切なのは、その知識観からの脱却に大学教員が寄り添うことなのだと思う。

ただ、そうは言っても大学は入試において、必須や選択という形で具体的な教科・科目を課しているのであるから、この呪縛から学生を解放することはなかなか容易ではない。

最近、センター試験の廃止も含め、入試制度改革に関する動向が頻繁に報じられている。だが、従来の方法に代わる選抜方法がこの教科的知識観から距離をとるものでなければ、根本的には何も変わらないように思われる。

一方で小論文や総合問題など非教科型の試験が折に触れ脚光を浴びるのは、コストはかかるが、このような選抜方法が教科的知識観を克服する可能性を有しているからであろう。私は小論文で大学受験をした。その時、高校で小論文の面倒を見てくれたのは国語ではなく世界史の先生であった。母校の教科横断的な指導に感謝している。